奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

努力の証明書

伊勢原市立中沢中学校　３年　福澤（ふくざわ）　彩花（あやか）

中学二年生の冬。新体操の全国大会で、自然と涙が流れた。

「そんなわけない。…でも。」

選手全員が演技を終え、結果が分かってからも、しばらくの間信じられなかった。しかしその後手渡されたそれには、確かに自分の名前が記されている。それはまるで、八年間続けてきた努力の、証明書のようだった。

初めて大会を経験したのは、小学一年生の時。そこで良い結果を残せなかった私は、悔しくてひたすら練習を重ね、次の年で全国大会への切符を勝ち取った。それからは毎年のように出場し続けたが、どうしても全国の大舞台では、力を出し切れなかった。

だからだろうか。私は、自分に自信を持てないことが多いように感じる。勇気を出すことも難しい。何かうまくできたことがあって、みんなに褒められたとしても、「そんなにすごくないよ」と言ってしまう。もはや癖のようなものだ。そのため、あまり心の底から笑い合ったことが少ないと思う。周りにもっとすごい人がいることを、毎年この目で見てきたから。自信に満ちあふれた笑顔で踊っている人たちを、たくさん知っているから。

だからこそ、もっと上へ行きたい。気持ちの面でも、新体操の技術の面でも。そのために、自分の武器である努力と集中力を活かし、一回一回の練習に真剣に取り組んでいたのだ。しかし、私が出場する部門のジュニアでは、中学生と高校生を一括りにし、同じ演技で勝負をする。自分より長い間やってきていて、理屈上は敵うはずのない相手だ。その相手とどう張り合うかが、一番の課題だった。

対策として、練習時間を今までにないくらい大幅に増やした。土日はもちろん、平日の夜も体育館に通い、出来る限り練習した。その方法が一番だと思っていた。むしろ、そのように追い込むことでしか、技術は身につかないと感じていた。

アザや擦り傷は日常茶飯事。ほとんど毎日体育館に通い詰め、幾度となく踊り込んだ。そうやって十一月の県大会を一位で通過した時には、捻挫を二回も経験するほど、体を酷使していた。

体の痛みは、時に、心の痛みと感じる事がある。休みたい。でも、休んだらせっかく身についたものが、ハラハラと崩れていくように思う。その葛藤をかいくぐり、ぎりぎりの状態を何度も綱渡りしながら、徐々に上達を目指していった。

思うようにいかなくても諦めず、気温が五度を下回る体育館でも、ひたすら練習を重ねた。寒さのためか関節が伸びず、喉の乾燥が痛みに変わっていった。それでも、少しでも練習をしない期間があると感覚が戻ってしまうことがあり、心配だった。本来なら、高校進学に向けて本格的に勉強を始めても、全然おかしくない時期だ。しかしその時間さえも、全国大会のために費やした。

大会当日も、出発時間直前まで練習してから現地に向かった。当日のコンディションを確かめておきたかったのもあるが、不安を少しでも取り除き、最後まで戦い抜きたかったからだ。今年こそ、自分史上最高の成績を手に入れるために。

そして気付いた。私はいつの間にか、こんなにも強くなっていたのだと。

会場に空調はついていなかったが、普段から冷え切った体育館で練習していたからだろうか。とくに動きが鈍ったり、指先がかじかんだりすることはなかった。緊張もしておらず、なぜか今回はそれほど大きなミスもなく、やり遂げることができそうな予感がしていた。昨年までは心配でどうしようもなかったのに。少なからず自分に自信がついていたことに、今更ながら驚いた。そして本番では、今までで一番自分らしい演技ができたと思う。

父も母も、褒めてくれた。応援に来てくれていた同級生も、おめでとうと言ってくれた。私は、そこで初めて、本当の意味で自分の実力を信じることができたのだ。

帰り道、夜空を見上げると、地平線の近くに月が浮かんでいた。丸い、大きな赤銅色の月だ。それは、あの膨大な量の練習が実を結び、手に入れた悲願のメダルと、同じ色をしていた。

努力は結果に繋がる。結果は自信に繋がる。私は今回、それを自分自身で証明することができた。しかし、それはきっと、これまで続けてきたからこそ得られたもの。もしどこかで諦めていたら、未だに自信を持てずにいたはずだ。私の実力は、紛れもなく日々の練習の成果であり、努力の結晶と言えるだろう。

結果を出すのは大変だ。だが、それに向けての努力は実力になり、やがて自信に変わる。

もっと色々なことに全力で取り組みたい。

いつか、自信を持って笑い合えるように。